

2022.07.26

農林水産政策研究所研究成果報告会

持続可能な農村ツーリズムに向けての アルベルゴ・ディフーズの可能性

農林水産政策研究所
國井 大輔

コンテンツ

1. はじめに
2. アルベルゴ・ディフーズ (AD) とは
3. ADの認定
4. ADの事例
5. 持続可能な農村ツーリズムに関する考察
6. コロナ禍でのAD
7. おわりに

1. はじめに

3

- 現在世界的に農村と都市との格差が問題となっており、特に条件不利な**農村部における収入増加策**として、農村ツーリズムへの期待が高まっている。
- 例えばヨーロッパ諸国では、条件不利地域における農家の収入増加策として**農家民宿（アグリツーリズム：AT）**への補助を行っている。
- ATが**農家の所得向上や農村活性化への貢献**に関する研究は数多く行われている(例えば、大江・CIANI,2005, Lupi et al.,2017 など)。

農泊：

農山漁村地域に宿泊し，滞在中に豊かな地域資源を活用した食事や体験を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」

➡ 地域が一丸となって取り組むことを重視。

大江(2019)：イタリアのATと比較し，我が国の持続的な農村ツーリズムの課題として「**経済性が低い**」ことを指摘。

アルベルゴ・ディフーズ (AD) :

町の空き家をホテルの一室として活用し，町を丸ごと活性化しようとする取り組み。

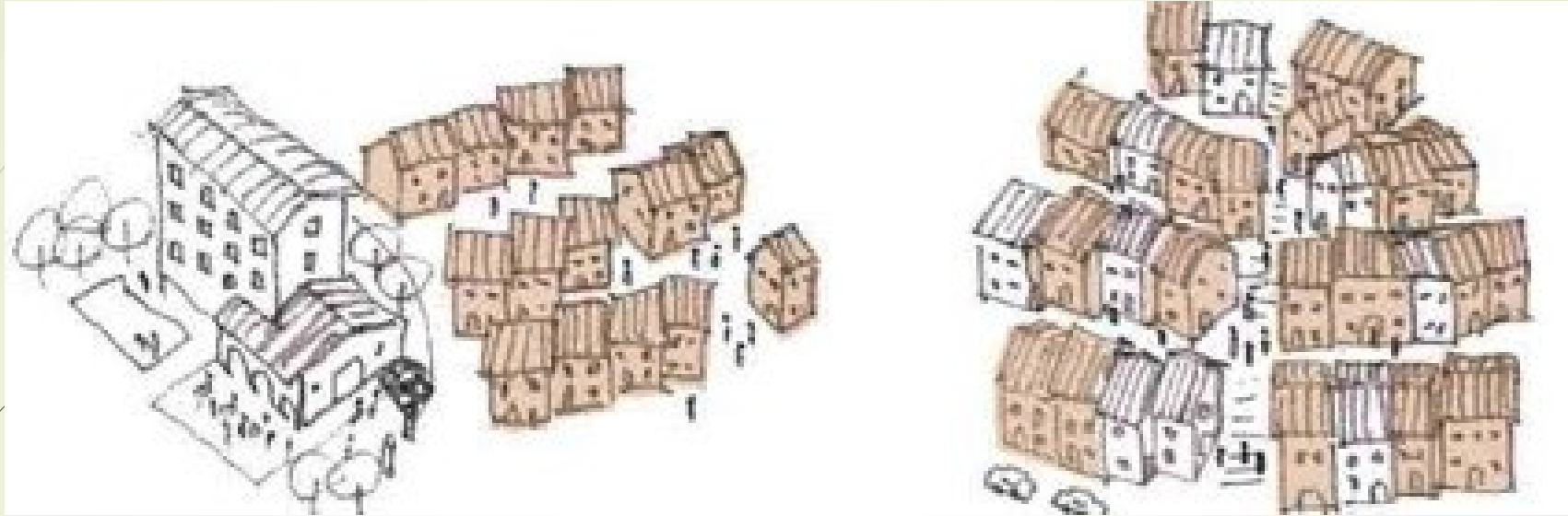
- ADにより，地域に新しい雇用が創出される等の効果が期待される(松下(2016))
- ADは地域を活性化させるとともに，地域のコミュニティの強化にもつながる (Cucari et al(2019))

本報告の目的

我が国における持続可能な農泊の実現の参考にするために，イタリアにおけるADの取組を整理し，持続可能な農村ツーリズムの実現に向けたADの可能性について考察する。

2. アルベルゴ・ディフーズとは

6



資料：AD協会Webサイトより転載。

- 地域に散らばっている空き家を活用し，建物単体ではなく地域一帯を点在型ホテルとするイタリア発祥の取り組みのこと。
- まち全体をホテルと見立て，レセプション，宿舎，レストラン等の構成要素がまち中に広がる。
- 地域に暮らすような滞在スタイルであり，地域の「水平的発展」を実現する観光地域づくりのモデル。

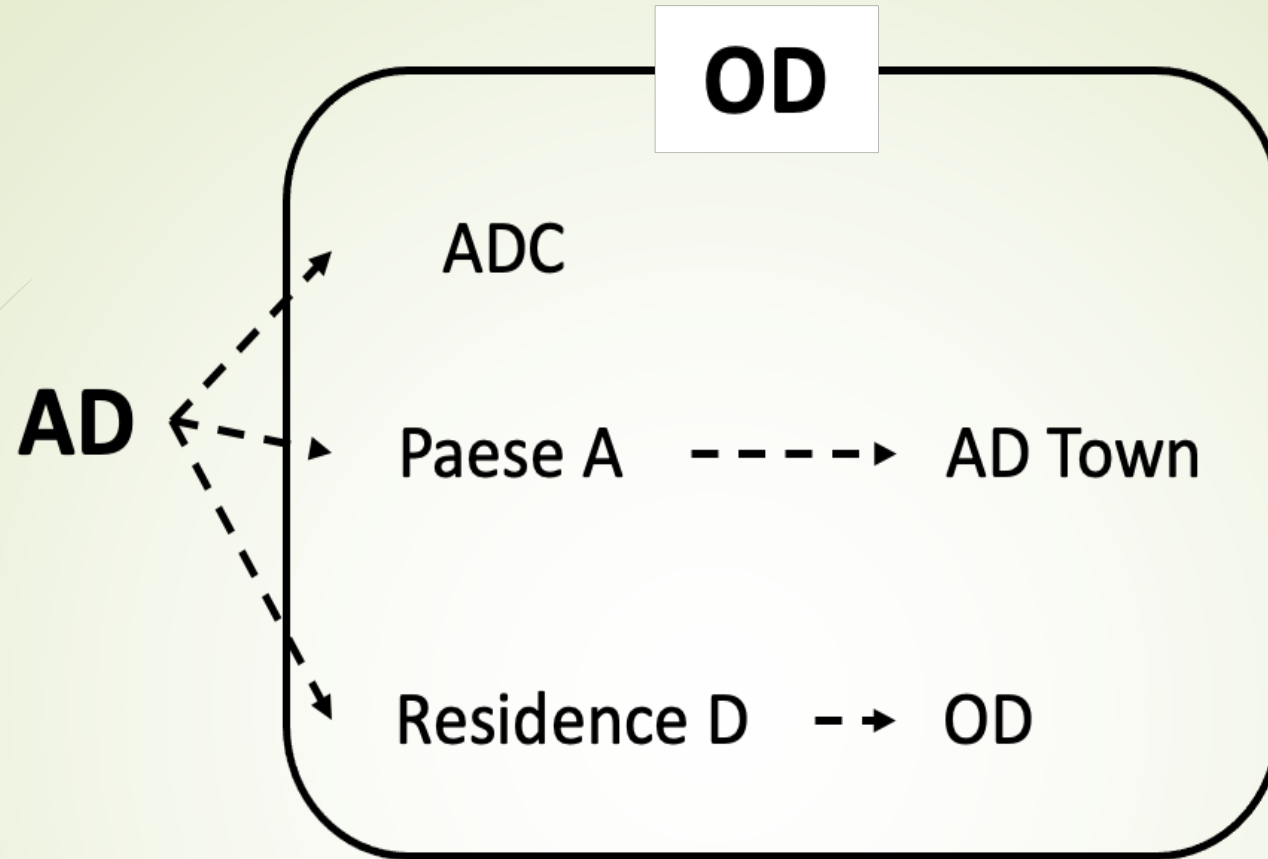
(ADインターナショナル極東支部Webサイトより。)

ADの条件

7

経営形態	ひとつの事業者が、一括して経営・管理していること
ホスピタリティのクオリティ	一般的なホテルと同等のサービス
建物と地域の規定	既存の建物を再利用したものであること。またそれが以前から人が暮らしてきた村や町に存在していること
施設	レセプションや共同スペース、レストラン、喫茶、バーなどの施設が設けられていること
建物間の距離	建物間は宿泊客の移動が負担にならない距離にあること。レセプションのある母屋と別棟との距離は200m以内を目安とする
地域	活気あるコミュニティづくりに寄与すべき存在であること。住民の生活があること
環境	ありのままの環境があること。直面する現実と、地域の文化が融合していること
認識性	はっきりとしたアイデンティティと、提供サービスの質がいつも安定していること
地域性	地域や地域文化と一体化した経営であること
連帯感	アルベルゴ・ディフーズとしての誇りと、アルベルゴ・ディフーズ同士の連帯意識を持って活動すること

資料：AD協会及びADインターナショナル極東のWebサイトを参考に著者作成。



AD: アルベルゴ・ディフーズ, OD: オスピタリタ・ディフーザ, ADC: 田舎のAD,
Paese A: 村まるごとAD, Residence D: 分散した宿

ADの概観

資料：ADインターナショナル極東支部代表長谷川氏へのインタビュー(2022年3月)をもとに著者作成。
注：長谷川氏によると、ADの概念は、基本コンセプトは変わらないものの、状況に応じて変化していくものである。

アルベルゴ・ディフューゾとオスピタリタ・ディフューザ

アルベルゴ・ディフューゾ (AD)

町の中に点在している空き家を一つの宿として活用し、町をまるごと活性化しようというもの。

オスピタリタ・ディフューザ (Ospitalita Diffusa : OD)

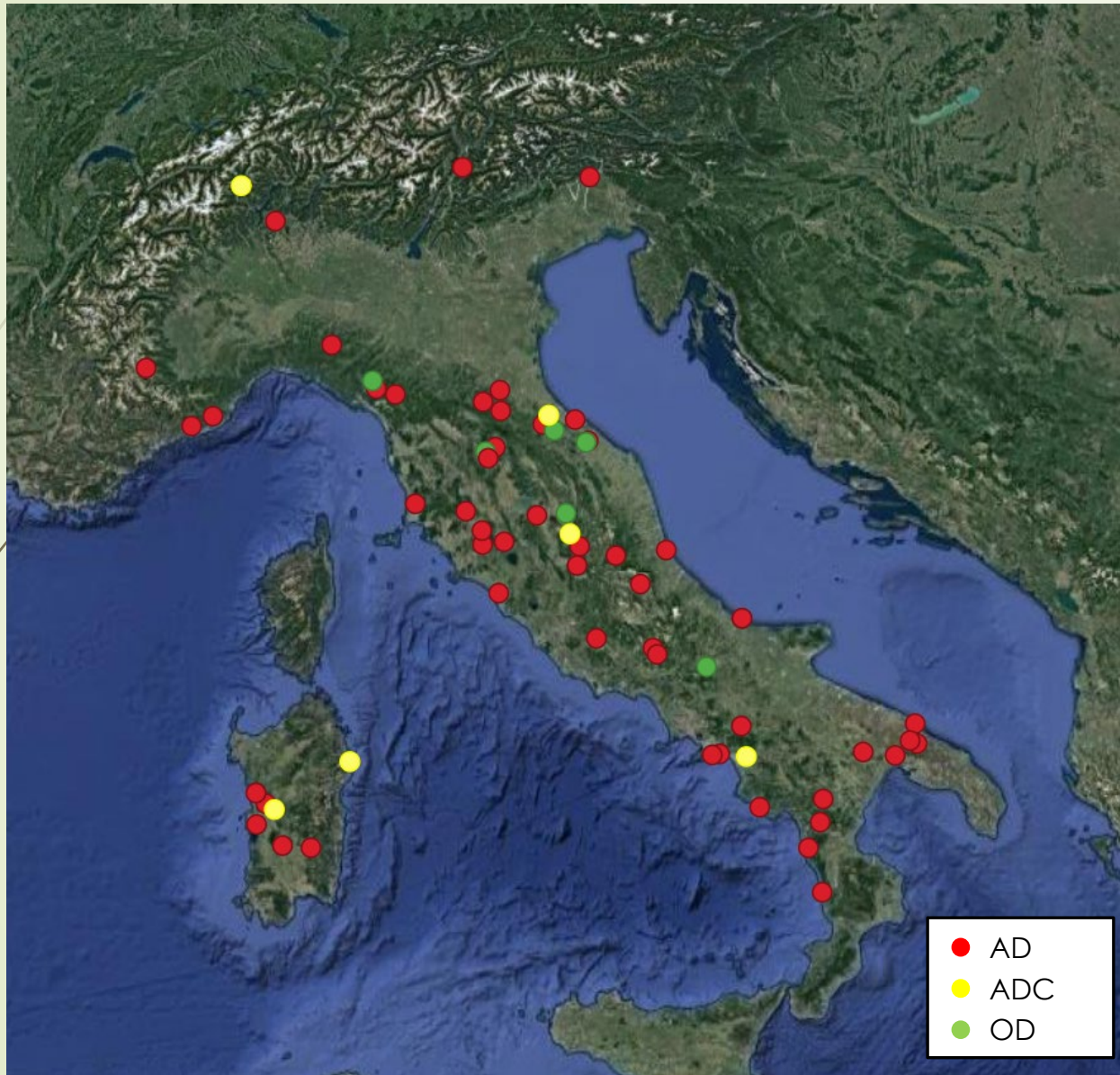
それぞれの経営が別の事業者であっても一つの組織として連携し、地域全体が一体となっておもてなしを提供することで、集落再生を実現しているケースに認められる。また、ODは母屋と別棟との距離もおおよそ1 km以内であれば対象となる。

資料：AD協会Webサイト，松下（2016），ヒアリング調査結果より著者作成

3. アルベルゴ・ディフーズの認定

10

- ADは、イタリアの観光基本法における「ホテルとホテル類似施設」として定められており（中橋, 2020）, 基本的にはホテルとして扱われる。
- 各州によって設置年度は異なるものの, 1984年から2018年にかけて, イタリアのすべての州の州法で, ADに関する制度が設置された（Droli,2019）。
- 州によっては, ADの基準が, AD協会の求める基準と異なる場合がある。例えば, レセプションから客室までの距離は, 州によって200mから500mまでと幅がある。
- 州法を満たした上で, AD協会に申請し承認されることで, AD協会認定のADとなることができる。



資料：AD協会Webサイトを参考に著者作成

イタリア全国で、多くのADが認定。

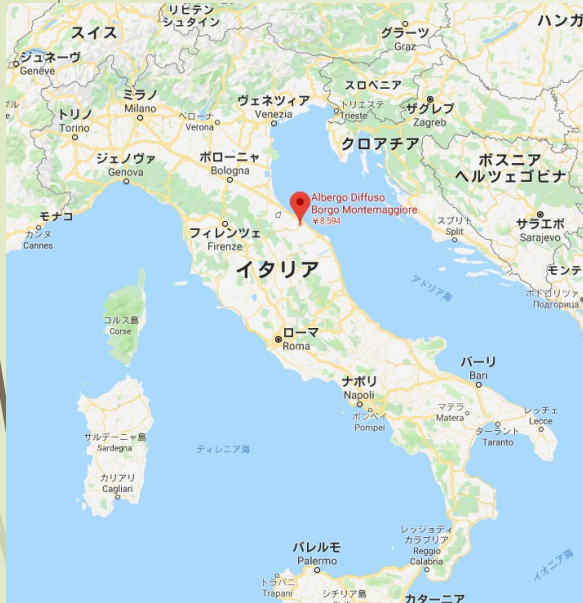
2020年11月現在、
AD：54
ADC：6
OD：7

がAD協会Webサイトで紹介。
特に、山間部に多く分布。

4. アルベルゴ・ディフーズの事例

12

Borgo Montemaggiore



マルケ州
ペーザロ・エ・
ウルピーノ県



Miglior prezzo garantito

21/08/2019



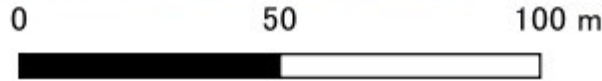
出典：Borgo MontemaggioreのWebサイト

1600年末からの歴史のある地域。現在は、10世帯20人程度が住んでいる。



レストラン

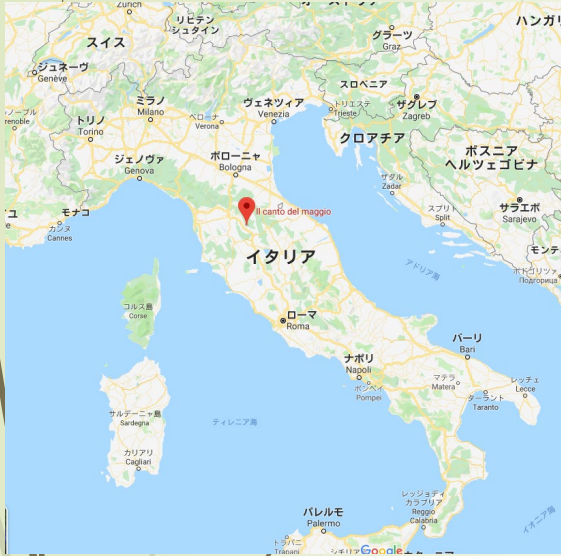
客室





- 部屋は、8軒23部屋。
- 宿泊客の9割はイタリア人。2割はリピーター。
- 7月～8月及びイースターとクリスマスが繁忙期。
- 平均3泊程度。
- おおよそ80～85€/日と90～95€/日。パソコンを使い、自ら流動的に価格は設定しており、オフシーズンは70€/日くらいにする。
- 地域住民を雇用している。

Il Canto del Maggio



トスカーナ州
アレッツォ県



菜園

プール

レセプション

レストラン

客室



0 50 100 m



google



- 集落には13軒の住宅があり， 9軒がAD， 4軒が住民宅である。
- 地域の住民からは，観光客が集落を訪れることに対する反発があったが，現在は近所の人からおすそ分けをもらえるような関係。
- ADは3， 4月～10月中旬までオープン。
- 5～9月がハイシーズン。
- 9月にはぶどう摘み取り体験， 10月にはワインのテイスティング体験ができる。
- ADを開始することによって，地域の地価が上昇した。



5. 持続可能な農村ツーリズムに関する考察

17

現地調査より

- 地域に分散している宿泊施設を利用することで、**地域内の観光客が回遊する仕組み**。
- 外見は周囲の民家と同様であるが、室内はホテルのような作りになっている。
- 宿泊事業としてのコンセプトで経営されているため、価格の設定やオンラインによる予約サービス、さまざまな体験メニューを用意する等、**効率性や収益性を考慮した取組**となっている。

既存文献より

- ADにおけるスタッフ雇用の48.7%が**地元からの採用**(JFC feruzzimassimo tourism & management, 2013)。
- AD開業により、**地元の地価上昇**、若者の移住、地元女性を中心とした伝統工芸の再生等の**経済効果**が表れている（島村2021）

- ADは、地域振興のコンセプトを持っているとおり、観光客と地域とのつながりを重視する取組であるといえる。
- ADの取組をきっかけとした、地域住民の宿泊以外の新たな取組が生まれる等、地域全体の活性化に寄与している。
- ホテル事業であるために、「おもてなし」だけではない収益性も重視されていると考えられる。
- 一方、ADの理念通りにコミュニティや文化、地域のアイデンティティの重視を実現できている例は少なく、今後いかに地域と連携するかが課題である（中橋, 2020）という指摘もある。

6. コロナ禍でのアルベルゴ・ディフーズ

19

- アメリカのメディアでコロナ禍におけるADに関する記事が掲載され、「ADが持続可能な宿泊スタイルである」として話題になった。
- ADの自然に触れることができ、伝統的な集落で過ごすことのできるコンセプト。
- 特に、分散型の宿泊形態という「密」を避けることのできる旅行スタイルが、コロナ禍において大変注目されている。
- コロナ禍を経て、ワーケーションの場所として、ADが適していると考えている。最近では、2～3週間の長さでの予約が入る場合もある。

資料：ダッラーラ氏へのインタビュー（2022年7月）より

7. おわりに

20

- 持続性の課題であった「経済性」を確保しつつ、地域として観光客を受け入れる農村ツーリズムの仕組みとしてADは有用。
- 自然や環境を重視する分散型の宿泊形態であるADは、コロナ禍において改めて注目を集めている。
- 我が国の農村地域においては、家屋が離れて立地しているケースが多いため、ADよりもODのコンセプトの方が適するケースが多いと考えられる。
- イタリアのAD自体は、農業との関連性は弱いため、我が国における農泊に取り入れるためには、コンセプトを明確にする必要がある。

今後の課題

- ADは農村地域で活発に行われているものの、農業との連携については整理。
- 我が国における導入可能性が見込まれるODについて、イタリア現地の分析。
- 近年我が国においても、ADやODの認定を目指す動きが見られるため、それらのフォローアップ。

ご静聴ありがとうございました。

